

山形県における紅花生産について

山形県農林水産部生産技術課園芸振興専門員 大嶋 博之

1 紅花生産・流通（消費）の現状と課題

本県の紅花栽培は、江戸時代をとおして最上川舟運を利用した一大産業を形成し、最盛期の幕末・文久(1861～1864)のころには、約800～1,500haの作付け面積があったと推計されている。

しかし、明治時代になると中国から四川省産の紅花の輸入が盛んになり、またドイツで開発された化学染料アリニンが普及したことにより、山形県の紅花生産は大きな打撃をうけ、明治10年頃には産業としての紅花はほぼ消滅している。

その後は、伊勢神宮や明治神宮といった特殊な需要に支えられながら、篤志家により種苗や生産の維持が図られたものの、戦時、昭和19年には食糧優先の作付統制により、山形の紅花栽培は完全に姿を消した。

戦後、山形市出羽地区の農家が一握りの種子を発見し、わずかな本数から復活させた最上紅花であるが、この貴重な資源の復興と振興を図るため、昭和25年に「山形紅花振興会（山形市、寒河江市、

河北町谷地）」が組織された。また、昭和29年には、山形市志村に「出羽村紅花栽培組合」が結成され、染料や化粧品向けの本格的な生産が始まった。

昭和30年代に入り紅花の生産は順調に増加し、昭和40年に、県庁農林水産部内に事務局をおいた「山形県紅花生産組合連合会（山形市、米沢市、高島町、川西町）」が組織された。これを契機に、新しい産地が次々に加わり、ピーク時には県内一円(15市町)にまで栽培が広がった。

昭和50年代に入り大手化粧品メーカーとの契約の打ち切りなどにより生産は激減したものの、伝統産業や、本物志向の根強い需要に支えられて、現在は山形市、寒河江市、河北町、白鷹町、上山市の各生産組合を会員として、本県の貴重な最上紅花とその栽培加工技術を承継している。

2 紅花に対する行政対応の概要（生産支援、需要開発等）

(1) 紅花振興連絡会議の開催（山形県、山形県紅花生産組合連合会）

本県の特産品である「紅花」は、県花として広く県民に親しまれており、その利用は染料としての伝統的な用途に加え、生花、ドライフラワー、

表1 紅花生産の推移
※生産量は一次加工品（紅餅、摺り花、乱花）数量

年次	組員数 (人)	栽培面積 (ha)	生産量 (kg)
平成元年	90	5.1	418
2年	82	4.8	318
3年	95	4.6	271
4年	80	4.0	270
5年	62	3.4	189
6年	64	3.2	206
7年	55	3.3	175
8年	52	3.2	140
9年	62	4.1	103
10年	54	3.9	229
11年	57	4.2	167
12年	51	4.0	136
13年	51	3.9	109
14年	50	3.6	156
15年	46	3.1	151
16年	43	3.8	88
17年	36	4.5	124
18年	34	4.8	99
19年	31	4.9	96
20年	33	6.1	241

※資料：山形県紅花生産組合連合会調べによる。



図1 紅花振興連絡会議

食品等多岐に渡って活用されてきている。また、さくらんぼと並ぶ、初夏の山形を彩るアイテムとして、町おこしや観光誘客の資源としても重要視されている。

このため、農業や観光産業、教育文化的活動の垣根を越えて、紅花に関わる多くの団体が一堂に会し、それぞれの活動について相互理解を深めるとともに、連携強化を図りながら、今後の紅花振興に関する検討を行っている。

(2) 紅花の里やまがた活性化対策事業(山形県農林水産部生産技術課)

紅花は、最上川舟運をとおして「最上川の文化的景観」を形成したキーアイテムであり、本県の紅花生産は、伝統行事や染め物・着物文化という我が国固有の伝統文化に重要な役割をはたしている。

また、現存する「最上紅花」種は、先人の努力により絶滅の危機をのりこえて維持されてきた染料用専用種であり、貴重な遺伝資源である。本種の優良種子を今後とも維持確保するとともに、新規栽培者確保への支援や観光産業との連携を図りながら本県における紅花生産の維持、振興を図る。

① 最上紅花種子確保事業

(内容)農業研究総合センターにおいて、「最上紅花」採種ほを設置して優良系統を維持するとともに、山形県紅花生産組合連合会に種子の生産を委託し、生産者等への種子供給を行う。



図2 最上紅花採種ハウス
農業研究総合センター
(カラーグラビア参照)



図3 検品中の紅餅
※紅花収納作業

② 紅花産業文化伝承推進事業

(内容)最上紅花栽培や紅餅製造等の一次加工技術を継承するため、紅花生産組合連合会と連携して、研修会の開催や農業技術普及課による技術指導等を行う。

(3) 心が和む紅花のみち推進事業(村山総合支庁)

県の花である「紅花」は、文化的・歴史的な背景に裏打ちされた人を惹きつける魅力に富む観光資源であることから、紅花に縁が深い市町が連携して資源の掘り起こしや情報の発信等を行うことにより、紅花の生産振興、観光地としての誘客拡大、地域のイメージアップを図る。

◎生産振興(紅花ビジネスの育成支援)

- ① 紅花ビジネス(栽培、紅花加工等)づくり
技術伝承者リスト、栽培加工マニュアルの作成、紅花ビジネス検討会の開催
- ② 紅花+そばビジネスの検討
実証ほの設置3カ所：組み合わせ体系技術・新たな活用法の創出

◎情報発信

- ① 紅花情報総合パンフレット作成
- ② ホームページ「紅花探訪」の運営

◎広域展開(紅花イメージ戦略の推進)

- ① 新たな活用方法を探る検討会の開催
- ② 新体験メニューの検証等

(4) 紅花生産組合連合会をとおした支援

- ① 生産の取りまとめと一元販売
山形産最上紅花の品質を保ち、最上紅花のブランド力を高めるため、生産及び需要調査



図4 検査員による検品（等級付け）
※異物等の混入を防ぐため全品全量を確認



図5 山形産紅花産地証明シール
(カラーグラビア参照)

《産地の取組事例》

山形県白鷹町「白鷹紅の花を咲かせる会」の取組み

1 生産の概要

白鷹町は、全国唯一の「最上紅花」の生産県である山形県にあって、その生産量の大半を占める産地です。

白鷹町の紅花生産は比較的新しく、平成3年に本会の事務局長が、0.3aを栽培したのが始まりです。しかし、文禄四年（1595年）頃の栽培状況について、当時の藩が特産物を記録した古文書「邑鏡」に記録が残っていることから、かつてはこの地でも盛んに生産が行われていたと考えられています。

白鷹町には、国の伝統工芸品の「白鷹紬」や「深山和紙」など、地域の産業と結びついた伝統の技が現在も生きています。こうした伝統産業との連携を図りながら、山形県並びに白鷹町の歴史や伝

を実施して生産物を一元的に集約し、需給調整を行っている。また、検査員による生産物の収納・検品を行い、等級を定めた上、一元的な協定価格であらかじめ予約のあった実需者に販売している。

② 最上紅花シールの配布と管理

最上紅花であることを表示するためのオリジナルシールを作成し、生産物の数量に応じて所定の枚数を納入先に提供している。

③ 広報活動及び技術研修会等の実施

栽培技術、加工技術等について、組合員相互研修等を実施している。

統文化に深い関わりのある紅花を、地域づくりの一環として古の昔と同様に咲かせようと、平成6年に本会「白鷹紅の花を咲かせる会」が会員数8名、栽培面積55aで発足しました。以来15年目となる平成20年度には、会員数21名、栽培面積は450aまで広がっています。

2 生産組織の活動と特色

本会の主な事業は、紅餅や乱花といった伝統的な紅花一次加工品生産ですが、特徴的な事業として平成7年から「白鷹紅花まつり」を毎年開催しています。このイベントは、県外からの紅花摘みや紅花染めの体験をしたいという方々からの問い合わせに応える形で、地元有志で実施したささやかな手作りの体験交流がきっかけとなっていま

す。こうした交流が口コミで広がり、体験型の特色ある観光イベントとして第8回目からは町主催となり、観光協会や他の地域づくりグループも加わって、現在は白鷹町の夏を彩る一大イベントとなりました。

紅花生産を続けるうえで、最も課題となるのが摘み取り労力の確保です。県内の他の産地でも、高齢化が進む中、摘み取り労力が確保できず、生産を打ち切る産地が出ているのが現状です。

紅花を一次加工した紅餅や乱花の単価は、それなりに高価であり、需要も現状では堅調であることから、多収できればそれなりの収入が得られる品目です。しかし、摘み取りに大変な時間がかかり、自家労力だけでは一戸で10a程度の面積しか栽培できません。まちづくりや文化的取組みといても、毎年継続するためには一定の収入が不可欠です。

このため、本会では、「白鷹紅花まつり」等に参加する観光客や、町内外の花摘みボランティアを「花摘み猫の手隊」として募集し、摘み取った花を有料で引き取る取組みを始めました。この取組みが本格化した平成20年は、摘み取り時期の好天に恵まれたこともあり、前年比150%の収穫量を上げることができました。生産物の清算前に摘み手への支払いが必要であること等、難しい問題も山積していますが、実際に参加したボランティアの方々からは「県内に住んでいても実際に紅花を摘む機会はないので、すばらしい体験ができた」等の高い評価をいただいています。

また、生産については、安全安心の取組みとして、使用農薬等については食用に使えることを前提とした最も厳しい基準を採用しています。本会の生産物は、山形県紅花生産組合連合会をとおして、一元出荷しており、染織や化粧品原料（紅）、食品用として全国に販売しています。



紅花摘み取り作業



花摘み猫の手隊が摘んだ花弁を計量



紅餅加工（花寝せ作業）
（カラーグラビア参照）